

(様式2)

学 校 関 係 者 評 価 報 告 書

愛媛県立宇和島南中等教育学校
学校番号 47

評 価 実 施 日		令和7年2月25日(水)	
委員	氏 名	所 属 等	備 考
	池田 博行	学校評議員(学識経験者)	
	伊勢元芳樹	学校評議員(JR宇和島駅駅長)	
	松為 教輔	学校評議員(名門サカイ株式会社代表取締役社長)	
	金瀬 聡	学校評議員(株式会社宇和島プロジェクト経営戦略室)	
	長野 宏展	学校評議員(宇和島警察署 交通課長)	
	篠原 大介	学校関係者評価委員(宇和島市立明倫小学校長)	
	田中 多紀	学校関係者評価委員(宇和島ケーブルテレビ 宇和島局 編成制作部長)	
	田中 和代	学校関係者評価委員(宇和島看護専門学校 教務部長)	

評 価 ・ 提 言 等	提言等に対する改善方策等
1 今年度の評価等について (1) 学習指導 ・特に家庭学習の充実について。200分以上を目標に設定することの妥当性については、家庭学習の目的に適合しているか検討が必要だと考える。内容を含め、自律的目標設定が望まれると感じる。 ・皆勤を目指すことを目標にするのは素晴らしいことだが、体調やメンタルへの配慮が重視される現代では、少し現実離れしているように思う。皆勤にこだわらず、90%以上出席といった基準の見直しを検討してみてもどうか。 ・(教科指導の充実)出席(皆勤率)について。評価はDであるが、34.5%の皆勤率は良い結果だと思われる。以前も評価ランキングで協議があったが、他校との調整を踏まえ、見直しても良いと思う。 ・皆勤率の低さがとても気になる。不登校も多いのか。出席を継続する指導について先生方は強く指導していると思うが、生徒に伝わっているかが疑問である。 ・1か年皆勤率の評価がDである。専門学校でも欠席・欠課する生徒が増えていると感じる。朝食を食べ、睡眠時間を確保し、生活リズムを整えた上に、基本的な学習習慣は身に付くと思う。生活指導と合わせて、改善方策を実施してほしい。 ・ITC機器を使用した授業により、生徒は先生の努力を感じているのが分かる。 ・学校評価アンケートの生徒評価が良く、評価は適切である。次年度への改善方法も適切である。 (2) 生徒指導 ・問題行動の発生件数は、昨年度に比べて減っており、しっかりとした指導が伺えた。先生方の情報共有がスムーズに行われている感じる。	・学習時間については、本校のマニフェストに沿って目標時間を設定しており、5・6年生の学習平均時間を200分にしている。調査期間も考査発表中、6年生の入試直前などに設定している。また、期間中だけでなく、担任は、毎日の学習時間、生活時間などの提出を通して生徒とやり取りしており、その中で変化や思いに寄り添う指導をしていると感じる。 ・課題の内容や出し方については、生徒の学習意欲につながるよう工夫が必要である。やらされるのではなく、自主的に家庭学習ができるような環境整備に努めたい。 ・コロナ禍以来、体調やメンタルヘルスへの配慮により、皆勤率は低下の一途をたどっている。引き続き、生徒には学校へ登校することの大切さを理解させ、学習意欲の向上につなげていきたい。また、皆勤率の在り方について今後検討していきたい。 ・ICT機器の活用については、教員の中では浸透しつつある。さらに授業改善をするともに、生徒の1人1台端末の有効活用についても研修を行いたい。 ・生徒に対しては、端末を用いるだけでなく、端末で何をさせるかを明確にして、授業や課題研究に活用できるように指導していきたい。 ・小さな問題を一人で抱え込まず、担任同士の連携を密にさせ、生徒課との情報共有を今後も図っていきたい。

(3) 進路指導

・国公立大学合格率、難関国公立大学と医学部医学科合格数を目標としている。どのような進路を描かせるかという視点が望まれると感じる。

・就職希望者に対する指導において、2.4%の生徒が「適切な指導や情報が十分に提供されていない」と感じている。全員の就職が決定したとのことだが、少人数の就職希望者の中で、そのように感じたまま進路決定をした生徒がいたのではないかと気がかりである。このことはしっかりと受け止めなければならないのではないかと。

・デジタル人材の育成がどのような結果になるのか、大変期待している。技術や知識を学ぶことはとても大事だが、「地域DX」を活かすも、ダメにするも「人」だと思う。是非とも「自分自身を磨いていく力」「対話力」を身に付ける学習もお願いしたい。「地域DX」も人対人である。

(4) 人権・同和教育相談

・教師と生徒・保護者として取組に対しての受け止めに違いが見られる。マイナス評価をしている生徒・保護者を少人数として気に留めないのか、一定数いることに真摯に向き合い、課題として受け止めるのか、学校全体としての向き合い方が問われているように感じた。

(5) 健康・安全指導

・難しくなったと言われる防災士試験に高校生が挑戦することは、地域にとって大変心強いことだと思う。日頃の学習＋αで大変だと思うが、これから多くの生徒が挑戦し、地域防災力向上のために力を発揮してほしい。学習成果発表会是非「FMがいや」で披露してほしい。

・（安全指導点検の強化）交通ルールの遵守について。自転車の青切符制度が4月から運用されるが、先日、生徒が歩道上を並進していた。地域住民の目も厳しくなることから、繰り返しの指導をお願いしたい。

・「悩みや相談に親身になってくれる先生がいない」と答えた生徒が12.1%存在する。その生徒が思い詰めたらと考えると大変心配である。「目立つ子の陰で目立たない子」をしっかり発見する手立てを今後とも講じてほしい。

・安全点検を教職員が行うには限界があるので、定期的に専門業者、機械を活用し点検整備をする必要があると思う（特に、地中に埋まっている部分や頭より高い場所にある部分）。予算面での課題もあると思うが、生徒の命にかかわることなので、可能な限り推進してほしい。

(6) 図書・視聴覚・情報教育

・前期生の読書冊数が、昨年度と比較してかなり減少していることが気になる。しかし、全体の貸出冊数が増加しているので、生徒のニーズに合った本を選定し整えられていると考える。読書によって語彙力や集中力、創造力を高めるなど、多くの効果がある。読書の楽しさを感じてもらいたいと思う。次年度への改善方法は適切である。

(7) 業務改善

・昨年の目標に「週1回の定時退勤を目指していく」とあったが、達成できたのか。まだまだ、長時間勤務の削減に向けた取組に不満のある人がいるように感じた。メディアでも教員志望が少ないと耳にする。長時間労働で体調を崩さないように頑張ってもらいたい。

・家庭・地域・関係機関等の外部との連携指導とはいうものの、学校・教職員における負担が増大しているのではないかと。

・校務分掌の繁忙期の違いや、教職員の得意分野・資質・能力の個人差があることはやむを得ないが、仕事量の偏りが最大限に抑えられているかを絶えず点検する必要があると考える。

・定時退勤を推進することが、教職員によっては新たなストレスを生む結果にならないかの検証も必要ではないかと。

・気軽に定時退勤ができ、有給休暇が取得しやすい職場環境の整備を今後も推進していただきたい。

・本校は、進学を目指す普通科高校であり、中でも、国公立大学への進学を目指す生徒が多い。その生徒の希望を叶える進路指導を通し、自分が選択した進路実現を果たすことを目的としている。その結果として、マニフェストにある数値目標を達成したいと考え、現在の目標を設定した。今後、マニフェストの見直しがあれば、目標の変更も検討したい。

・学校評価アンケートは、3～6年全学年を対象に実施しており、現時点では情報が十分でないと感じた生徒もいることを真摯に受け止めた。ただ、今年度、就職を決めた生徒は、早い段階から就職を選択し、担任や進路課とともに十分に対策して進路先を決定しており、前向きな進路選択ができた。

・デジタル技術やスキルを学ぶだけではなく、学んだことを用いて何ができるのか、どのように地域に貢献できるのかを考えさせつつ課題研究に取り組ませていきたい。

・人権・同和教育全般及びいじめ問題等に係る取組についての評価を真摯に受け止め、学校に考えや思いを訴え出せていない生徒や悩みを一人で抱え込んでいる生徒に寄り添い、迅速な対応を学校全体で共通認識を持って取り組んでいきたい。

・地域住民の防災意識を高めるために高校生の防災士資格取得は有効だと考えるので、引き続き取り組んでいきたいと思う。そして「FMがいや」での学習成果の発表も是非行わせていただきたい。

・道路交通法の改正を理解させ、交通ルールの順守及びマナーアップをさらに強化していきたい。

・一人の生徒も見落とすことがないように、生徒のアンケートや相談、面接等で日頃の些細な変化等に気付くことができるように全教職員で取り組んでいきたい。

・今年度、専門業者による校舎外壁検査を実施した。また、電気設備や消防設備については、専門業者による定期点検を実施しているが、今後も教職員の安全点検と専門業者による点検を併用しながら、施設設備の適正な管理に努めていきたい。

・近年の社会現象である読書離れの傾向が、前期生に顕著に表れている。後期生の読書量の個人差も大きく、今後、学校全体の読書冊数減少が懸念される。来年度も朝読書を継続して実施し、読書の効用や楽しさを実感させるとともに、本の選定やイベント等の実施方法を工夫して、生徒が足を運ぶ、魅力ある図書室づくりに努めたい。

・EILS-PBTの活用など、ICTを用いた業務改善を進めるとともに、テレワークの活用を呼び掛け、柔軟な働き方を推進する。また、管理職による面談を通して、業務量や健康状態を把握し、長時間勤務の未然防止に努める。

・家庭・地域・関係機関との連携については、役割分担を明確にするとともに、支援員等の適切な配置を進め、教職員の負担軽減を図る。また、校務分掌の見直しを行い、特定の職員に負担が集中しない体制づくりを進める。

・日常的な情報共有と風通しの良い職場づくりを推進し、業務量の隔たりや困り感を気軽に相談できる環境を整える。

(8) その他

- ・(特色のある学校教育)について。特にグローバルな取組については、生徒の視野が広がり、また、企業等と連携した取組を今後も続けてほしい。
- ・令和7年度のマニフェストに地域DXを支えるデジタル人材の育成をあげて取り組んでいたと思うが、具体的数値目標は達成できていない結果になっている。しかし、すぐに結果が出るものではないと思う。次年度には松山大学との連携を生かし、DX社会に対応できる基礎的技術を育成するプログラムを組み込みたいとあるので、成果を期待したい。その他の数値目標は達成できており、評価は適切と考える。
- ・学校単独の語学研修や国際交流の機会も拡充、進路探求集中講座の開催など、特色ある学校教育の推進に力強く取り組んでいることがよく分かる。さらに来年度予定の松山大学との連携を生かした取組にも期待が持てる。今後も魅力ある教育活動の創造に努めてもらいたい。

- ・次年度のDXおよび国際分野の取組に寄せられた高い期待を重く受け止め、連携機関との協働を一層深めながら、生徒の資質・能力を着実に伸長させる教育活動の充実に努めていきたい。
- ・松山大学や河原学園の協力のもと、資格取得やスキルを身に付けるための講座を開講し、受講希望生徒の夢実現をサポートできるようにしたい。

2 学校評価に関する提言

- ・手段としての目標が目的になってしまっていると感じる。何のための、どのような取組なのかではなく、数字が目標になってしまっている感を否めない。この点の改善策が必要であると感じる。
- ・グラデュエーションポリシー、カリキュラムポリシーは素晴らしいと感じ共感を覚える一方で、評価項目ごとの具体的な目標がポリシーの具現化に寄与するものになっているのか、見直しの必要を感じた。

- ・目標設定については、数値のみを目的化するのではなく、「何のための取組か」「どのような教育効果を目指すのか」を明確にし、指標を設定していきたい。数値目標はあくまで成果を測る手段として位置付け、取組内容や教育的意義と関連付けて評価していきたい。
- ・ポリシーとの整合性については、各評価項目がポリシーの実現にどのように寄与しているかを整理し、必要に応じて評価項目や指標を再検討したい。

3 学校運営への提言

- ・地方での少子化、人口減少による学校教育の維持と質の保証に向けた取組の必要性は感じるものの、成果は現れるのか。
- ・体罰調査は実施しているのだろうか。行き過ぎた指導を防止する観点からも、未実施であれば把握に努める必要があると思う。
- ・来年度以降の高校教育改革については、産官学金労言の各セクターに加え、地域の保護者、市民を含め、地域の意識改革が不可欠であると認識する。この意識改革のための取組は、高校の先生が全てを背負わないように、地域側に何らかの仕組づくりが必要であるということを強く提言する。具体的な進め方についてはあらためて協議の場を持っていただければと思う。
- ・水産高校との統合を控えて、様々な想定をして準備を進めていると思われる。想定外のこと(学校が動き始めて分かること等)に対応するために、初年度はできるだけ行事を簡素にし、学校全体にゆとりを持たせることはできないか。また、可能な行事等は2年目以降に実施することを考えてはどうか。

- ・少子化・人口減少を踏まえた教育の質の確保については、地域と連携した探究活動をさらに推進し、学校の魅力化を図るとともに、教育活動の成果を積極的に発信していく。また、取組の成果を定期的に検証し、改善を図ることで持続可能な学校運営につなげたい。
- ・体罰防止については、6月に実施した「不祥事防止のためのチェックリスト」内で確認している。
- ・高校教育改革に関しては、地域の理解と協力が重要であるため、学校評議員・学校関係者評価委員会やPTA総会等を活用し、保護者や地域住民への情報発信と意見交換の場を設けたい。地域と学校が役割を共有しながら教育を支える仕組みづくりも検討する。
- ・新校開設に伴う新しい学校運営については、教育活動や学校行事の円滑な実施ができるように、来年度にしっかりと準備を行い、教職員・生徒双方の負担軽減と円滑な学校経営を目指したい。新校開設後も、学校の状況を踏まえながら、安定した教育活動を展開できる体制を整えていきたい。